

感染症大流行時代の人と動物の関係

吉田 央

COVID-19の世界的パンデミックのなかで、人と動物の関係が、注目を集めている。

2003年に発生した重症急性呼吸器症候群(SARS)の感染源はキクガシラコウモリであり、2012年に発生した中東呼吸器症候群(MERS)の感染源はヒトコブラクダであるとされている。このような野生動物から人間に感染する人獣共通感染症が、新しい感染症(新興感染症)として次々に現れている。COVID-19の原因ウイルスも野生動物からヒトに感染したことが疑われている。

一方、ひたすら効率性と低コストを追求する工業的畜産に対する批判の動きが、ヨーロッパを中心にして根強く続けられてきた。工業的畜産においては、家畜はまともに身動きもできない狭いスペースに閉じ込められ、過剰な飼料を与えられて急速に成長させられる。さらに、そのような環境での病気の発生を防ぐために、抗生物質をはじめとした薬物が投与される。このような工業的畜産のあり方を批判する市民の力は、すでにEUを動かして家畜のアニマルウェルフェアを尊重する法的規制が強化されつつある。

さらに21世紀に入ってからは、人・ペット・家畜・野生動物の健康とそれらを取り巻く環境を結び付けてとらえる「ワンヘルス」という新しい思想が注目を集めている。そしてCOVID-19の世界的パンデミックは、単なる一つの感染症への対策を越えて、現代の世界のあり方に根本的な見直しを迫っている。

このような状況を踏まえ、本特集の第1論文の古沢論文では、歴史的・マクロ的なパースペクティブからヒトと動物の関係を検討していただき、アニマルウェルフェアやワンヘルスの概念が現れてきた根拠を明らかにした。

本特集の第2論文である戸上論文は、「ワンヘルス」について掘り下げて世界での取り組みの現状と、今後の展望を述べている。

第3論文の植木論文では、EU(国際機関としてのEUおよび加盟各国の双方)におけるアニマルウェルフェアの取り組みの現状が述べられている。日本の農林水産省が2021年に策定した「みどりの食料システム戦略」ではアニマルウェルフェアが位置付けられており、今後は日本においてもアニマルウェルフェアの役割が大きくなっていくことが予想される。

ヨーロッパにおいて、人と動物の関係の見直しの大きなきっかけになったのは、1990年代に深刻化した牛海綿状脳症(BSE)の問題である。BSEは、本来は草食動物であるウシに動物性の肉骨粉を飼料として与えたことによって発生した。第4論文の神里論文では、新しい病気であるBSEが出現した時に、情報も知識も十分でない中、科学者が政治や産業への妥協を強いられ、結果として科学に対する信頼の失墜を招いたことが述べられている。

いずれも読みごたえのある論文であると自負している。

(よしだ・ひろし：東京農工大学，環境経済学)